

1984年発行の本。大事なことが歴史的事例を踏まえながら書かれている。

第一章 危機をのりきる発想法

シルヴァー・ライニング (Silver Lining)

始まったことは必ず終わる——苦境に耐える発想法

==千五百日の地獄に耐えた内藤泰子さん==

グッド・ルーザー (Good Loser)

人の噂も七十五日——失敗・敗北に耐える発想法

==挫折を知らない大指導者はいない==

レッド・テープ (Red tape)

法三章の精神——[杓子定規を戒める](#)

==真珠湾の英雄、ウェルナ中尉の悲しい武勲詩==

ケイン・コンプレックス (Cain Complex)

近親憎悪を戒める——味方を最大に、敵を最小に

==「対日感情の一番悪い国？ やっぱりニッポンですね」==

第二章 危機シフトの人事管理

トロイカ (Troika)

権力のトロイカ——人事・予算・決定権

==戦慄すべき復讐を遂げたヒットラーの権力==

ゲリマンダー (Gerrymander)

人間ピラミッドを構築せよ——組織は人が動かすもの

==手足をもがれた山下泰文大将・ロンメル元帥の悲劇==

トラブル・シューター (Trouble Shooter)

火消し役の起用——年功序列と適材適所

==成功のかけにメリット・システムの人事==

キャロット・アンド・スティック (Carrot & Stick)

信賞必罰——飴と鞭

==総監賞と懲戒処分を同時に受けた署長==

第三章 任務附与と指揮命令

バトル・ステーション① (Battle Station ①)

総員戦闘配置ニツケ——無理・無駄のない任務附与

==遊び駒はないか、ダブル命令はないか==

バトル・ステーション② (Battle Station ②)

持ち場を死守せよ——愚直者は組織の宝

==トルーマン大統領暗殺未遂事件の教訓==

リロード (Reload)

次発装填——残心の構え

==8ミリフィルムは五呎(フィート)残せ==

第四章 闘争と交渉

ザ・プレリュード・トウ・ホンコン (The Prelude to Hong Kong)

香港への序曲——殺鶏嚇猴 (さる)

==適中した英作家の分析==

ガンボート・ポリシィ VS バーゲニング・パワー (Gunboat Policy VS Bargaining Power)

砲艦外交に屈しなかった英国——息づまる英中対決

==中国「欲擒先縦」へ政策転換==

ブラフ (Bluff)

香港暴動・マカオ事件の教訓——対蹠的な危機対処ぶり

==イギリス人は勝ち、ポルトガル人は負けた==

ロウ・ポストチュア (Low Posture)

喧嘩は低姿勢から——マカオ事件のもう一つの教訓

==案山子の空威張り==

ゴウ・フォア・ブローク (Go for Broke)

カジノにみる勝負観の違い——合従連衡の術

==同盟して敵の自滅を待つ==

第五章 危機対処の組織管理

デア・コンGRESS・タンツト (Der Kongress Tanz)

会議は踊る——「危機管理」に会議はつきもの

==判断を誤ったグアドループ島の四首脳==

ピー・アール (Public Relations & Press Release)

危機管理の記者会見・十戒——マスコミへの対応

==効果的広報のための情報管理==

ダメージ・コントロール① (Damage Control ①)

被害局限措置——米海軍を救った発想法

==議会勲功章に輝くパーク予備中佐の功績==

ダメージ・コントロール② (Damage Control ②)

組織防衛——現代社会におけるダメージ・コントロール

==抗議対策など、組織の“パンク直し”==

第六章 兵站補給

ゴウ・ダッチ (Go Dutch)

危機管理の経理——経費負担区分は先議事項

==トラ騒動の教訓「トラは死してツケを残す」==

ロジスティクス (Logistics)

兵站学のすすめ——クラウゼヴィッツより大切な研究

==兵站軽視の日本的用兵思想==

ロジスティック・サポート (Logistics Support)

後方支援——「兵站学」のカリキュラム

==<天然現象居士>ではこれからの指導者になれない==

— — — — —

《ライニング Lining》とは、洋服など織物の裏地のことで、この問題の場合は、『Every cloud has a **silver lining**』(すべての黒雲の裏側は明るく輝いている)という英語の諺からきたもので、「絶望・不幸などの最中の明るい希望」を求めること、すなわち「苦境に立たされても、希望を捨てず、物事の明るい側面をみるように努めなさい」という、楽天主義的発想をすすめる人生教訓なのである。

表現は、《シルバー・ライニング》といささか違うが、苦境に耐えるための発想法として、経験則から学んだもう一つの教えは、

『**始まったことは、いつか必ず終わる**』

ということである。人生経験を積むうちに、どんな楽しいことも、幸せも、栄光も、勝利も、いつか必ず終わりがくるのが人生の定めであるが、同時に、どんなに辛い、嫌な、苦しいことも、いつか必ず終わる……ということに気がつく。

◆苦悩に耐えるための発想法； Good Loser, Lesser Evil

失敗したり、敗北したりしたとき、男らしくそれに耐え、時代の流れに逆らわず、雌伏すべきときには雌伏していることのできる《グッド・ルーザー》には、不思議と何時か、また、出番がまわってくるものなのである。

《レッサー・イーグル》すなわち『不幸中の幸い』あるいは『せめてもの慰め』という比較緩思考の考え方である。

“悪いこと”が起こったら、とっさに“より悪いこと”“最悪なこと”を思い起こし、それと比べてみて、まだましだと自分にいい聞かせるやり方で、これは『最悪に備えよ』『悲観的に準備せよ』という発想と同一延長線上にある心の安全弁である。

自分ほど惨めで不運なものはいないと感じたときは、巨視的に歴史をふりかえり、世界を見渡し、自分よりもっと悲惨で不幸だったのであろう人たちを想起することだ。泣きたい時、

苦しい時は、上や横をみず、下をみて、もっと苦しんでいる人々の存在を想い、感情移入を試みて、自分はまだまだ恵まれていると、現状に耐える心の支えとする、この《レッサー・イーヴル》の思考法は、人を発作的な自殺や精神の崩壊から救ってくれるだろう。

red tape

【名】

〔形式的で非効率な〕お役所仕事、〔過度に煩雑な〕官僚主義的手続き◆【語源】18世紀のイギリスで法律文書などを結んでいた赤い布のテープから。19世紀になると「お役所仕事」の意味で使われるようになってきた。

《法三章》とは、漢の劉邦が秦の都、咸陽を占領したとき、それまで横行していた煩瑣な秦の悪法を全廃し『法ハ三章ノミ。スナワチ人ヲ殺シタルモノハ死刑。人ヲ傷ツケクモノ、物ヲ盗ンダモノハソノ程度ニヨソテ罰スル』

と定めて占領行政を行ったという史実から生れた言葉である。

つまり肝腎な大綱のみキチンと、簡潔に法で定め、あとは運用に任せるというやり方を《法三章》とよんでいる。

どこの組織にも「法匪」もいれば、古い不文律を暗誦した「語部」もいる。「マルポツ博士」もいれば、「生き字引」もいる。

「歩く内規」「口をきく教範」、それに「誤字脱字専門官」もいる。古い伝統のある組織になればなるほど、そういう『隅の御隠居』的存在は、隠然たる勢力として厳存している。

~~~~~

法匪

《匪は悪者の意》法律の文理解釈に固執し、民衆をかえりみない者をののしってという語。

~~~~~

朴大統領暗殺 昭和 54 年 10 月 26 日

ヒトラー暗殺計画 “ワルキューレ作戦”

天保銭組

~~~~~

【天保銭組】(てんぼうせんぐみ)

旧日本陸軍で、陸軍大学校の課程を修了した将校をあらわす俗語。卒業生が軍服につける「卒業生徽章」が江戸時代の百文銭(天保通宝)に似ていた事に由来する。更に卒業時の成績上位 6 名は、天皇から恩賜の軍刀を下賜されたため「軍刀組」と呼ばれた。

~~~~~

gerrymander

名

勝手な選挙区改定◆【語源】米国で 1812 年にマサチューセッツ知事 E.Gerry が自分に有利になるように決めた選挙区画の形が火トカゲ(salamander)に似ていたところから、gerry + salamander = gerrymander となった。

他動

〔選挙において自党が有利になるように選挙区を〕区割りする

〔規則などを自分に有利なように〕改変する、ごまかす

~~~~~

年功序列制 Seniority System

交渉の場合、とくに国際交渉の場では、交渉を自分に有利にすすめたかったら《取引材料 バーゲニング・パワー》をもって《取引きできる立場 バーゲニング・ポジション》に立って、駆引きをしなければいけない。

国際貿易でも同様で、国際商戦の達人の商社マンの友人 A 君にいわせると、「国際商取引の駆引きのコツは、相手が売りたいといったら買わないといい、買いたいといったら売らないということだ。それは別の相手に売るぞ、別の相手から買うぞということだから、日頃からそう言えるような条件づくりをしておくことが大切だ」という。

科学技術上のノウハウにかかわるロイヤリティーや、研究開発費分担問題のからむ交渉も同じで、我が方に自力開発の能力や可能性がなければ、相手はなかなかリリースしてくれないし、かりに OK が得られても高くつく結果となる。我が方に自力開発の実力があり、かつその気構えを示せば、それは強力な競争相手の出現を意味することになり、相手の譲歩を得る《バーゲニング・パワー》にもなる。

殺鶏嚇猴（さる） 「猿」（英国/香港）を脅かすための「鶏」（ポルトガル/マカオ）

「欲擒先縱」 『捕えようと思ったら、まず自由にさせておいて安心させ、じわじわ捕えるべし』という戦法。

### 後の先（ごのせん）

この発想法は、第一撃、先制攻撃を相手にさせることによって、正当防衛というか、防衛戦争の正当性の錦の御旗を手に入れ、世論の同情・支援をかちとり、相手の立場を悪くするという戦略的配慮にもつながるものである。

一度でも実際に地震・水害などの災害対策や、航空機墜落事故などの大事故や、大規模な大衆行動、大部隊による治安警備行動など、人間の大集団を動かした経験のある人なら、この《後方支援 ロジスティック・サポート》という「食ウ・寝ルトコロニ・住ムトコロ」にかかわる業務が、いかに

時間と労力と費用と知恵の要る大変な仕事であるかがわかるだろう。そして、実際にやってみると、この**兵站業務がどれほど厄介な、うまく行かない仕事である**かも悟るだろう。

第二次大戦の日本軍部は、《槍先重視・後方軽視》の誤った武士道精神に則って、近代戦遂行に必要な《兵站学》学ばないまま、無謀な戦いに突入して、悲惨な敗北を喫したことは、前稿で、るる述べたとおりである。

・・・

また、これまで順風満帆、泥まみれの現場からはるか離れたデスク仕事で、手を汚さない綺麗な仕事ばかりして高い地位にあがってきた高級幹部が、職責上、突発した危機に対する危機管理責任者になると、この精神主義的姿勢、サムライ美学的アプローチがにわかには前面に出てきて《兵站》の重要性についての認識はうすれがちになる。

危機管理経験のない、順風満帆の《天然現象居士》は、ともすると「寝食ヲ忘レ」などという言葉の悲愴感に酔ってしまい、『武士は食わねど高楊枝だ。一食や二食、食わなくなったって死にやせん、眠らんでやれば寝るところだの寝具の心配はいらん。現場のもの共に、つまらん文句をいわず、火の玉になってやれと言え』といった高飛車な調子で、危機対処の指揮をとろうとするものだ。